

1860年代以後におけるゴーゴリ作品の受容の変遷

大野 齊子

はじめに

ゴーゴリ作品の読み方の変化

数十年単位で文学作品の受容を追うと読み方が変化しているのがわかる。有名な作品がある時期から忘れられたり、娯楽小説だったものが教養になる。ゴーゴリ作品の読み方も19世紀を通じて変化した。

その変化は多元的で、大きな転換期を何度も迎えた。本論文ではその大きな変化のうちの一つを論じる。その変化とはゴーゴリ作品がある時期から啓蒙的な作品といわれるようになったことである。以下では啓蒙という点に着目してゴーゴリの受容史の変化を概観する。

まず、ゴーゴリが作家活動をしていた1830年代から1840年代頃、ゴーゴリの作品は知識人の高い関心を集めていた。1842年には初めてのゴーゴリ著作集が出版され、『死せる魂』は知識人の間でベストセラーとなった。1830年代から1840年代は同時代の作家としてのゴーゴリに対して高い関心が向けられていた時期だといえる。

ゴーゴリが亡くなった1852年以後も著作集が1855年から1857年にかけて出版され、関心は持続した。しかしゴーゴリ作品のイラストが制作されても出版が実現しないなど人気のかげりも見え始めた。

1860年代にはこの傾向がますます顕著になった。出版史上有名な画家であるボクレスキイ、パーヴェル・ソコロフ、ジチイなどがゴーゴリの代表作に見事なイラストを制作するがそれが同時代に出版されることはなかった。一部の知識人の間ではゴーゴリへの関心が高く、現在でも社会思想と関連づけられて語られることがあるが、文集というジャンルのメディアにおいてもゴーゴリが出てくる件数は1860年代にたったの4回¹と意外なほど少ない。

つまり一部の知識人の間では関心が高かったが、より広い読者層という枠組みで見るとゴーゴリは過去の人として忘れられつつあったといえる。こうした観点から1860年代は受容史において転換期と見ることができる。

¹ *Смирнов-Сокольский Н.* Русские литературные альманахи и сборники 18-19 вв. / Под ред. Ю. И. Масанова. М.: Книга, 1965.

1860年代が転換期だと考えるのはそのあとの1870年代以後、関心の度合いだけでなく読み方にも大きな変化が見られるためである。1870年代に再びゴーゴリの出版点数が増加した。しかもその出版は知識人ではなくもっと広い読者、たとえばまだゴーゴリを読んだことのない人向けに行われた。1880年代、1890年代を通じてゴーゴリの個別の作品が単行本でいくつも出版され、ナロード向けと銘打ったものもあった。こうした出版は啓蒙を目的としていることを明記している点に特徴があった。啓蒙を目的としてゴーゴリ作品を出版する傾向はその後20世紀初頭まで続いた。

このように見ると、関心の強さ、読み方の変化の点で1860-70年代の間に変化が起きたとみることができる。だが、この変化はまだ分析対象になっておらず、問題の焦点も定まっていなためよくわかっていない。この変化をどのような角度から論じればよいのだろうか。

1860年代に始まる読みかえのプロセスをたどる

この変化を考察するにあたり、受容史から考察した仮説を提示する。

啓蒙を目的にゴーゴリを読むという読み方そのものが構築されたのは、実際に啓蒙目的の出版物が盛んに出される1870年代よりもその前の1860年代である可能性が高い。さらに1860年代は一般のゴーゴリへの関心が弱まり、一部の知識人によって社会思想と関連づけられた読み方が優勢となった時期である。読みかえは1860年代の知識人のもとで行われた可能性が高い。

一方1870年代以後の出版活動を検討すると、啓蒙熱の高まりは知識人の思想的影響もさることながら出版状況そのものの変化を大きな要因としている。

つまり、1860年代の知識人の読み方という小さな変化がゴーゴリを啓蒙と結びつける出版活動の大きな傾向と親和して生き残ったのではないかというのがこの論文の仮説である。ゴーゴリを題材として、文学作品の受容の変化を、読み方が時代の選択を経て生き残るプロセスとするとらえ方のケーススタディとしたい。

第一章では1860年代にどのようにして読みかえが行われたかを跡づける。第二章では1870年代以降に出版活動の中で読みかえが定着し、啓蒙的な読み方が継続しながら変化も見せるプロセスを確認する。

第一章 1860年代におけるゴーゴリ作品の読みかえ

1860年代においてゴーゴリは一部の知識人が熱心に読む作品であった。しかしゴーゴリを明確な目的意識の下で、より広い読者のものとして啓蒙の目的で読みかえたのは教育に携わる知識人であった。

だが、啓蒙的な読み方をしたのは彼ら以外にもいたのではないか。また一部の人間の読み方にそんなに影響力があったのか。果たしてそれほど重視する必要があるのかという疑問がうかぶだろう。

こうした疑問に答えるためには、ゴゴリを読むこと自体が1860年代の教育とどれほど密接に関わっていたかを考察する必要がある。教育者がゴゴリを啓蒙的な作品として読みかえるにあたってはどのような事情があったのか。そして彼らはどのような目的のもとで、ゴゴリをどう解釈したのだろうか。

第一節では1860年代における教育改革の経緯を跡づけ、新しい教育者が目指した教育と作品の読みかえの関連を考察する。

第一節 1860年代における教育の世俗化

a. 宗教の統制力が低下する

1860年代は政治上の大きな転機であり、教育にも転換がもたらされた時期だった。

農奴解放以後、教育の改革が重要な課題として浮上し、政府による学校改革が行われる一方、農奴解放に伴う革命的な社会運動の高まりの中で多くの教育者や思想家による教育運動が活発化した。これに携わった教育者はそれまでの教育を見直し、新しい教育理論を打ち立て、実践を通じて教育を変えていこうとした¹。

1860年代の教育改革は教育を統制する世界観を巡る、教会と近代的教育を目指す知識人との間の争いという性格を持っていた。

従来教育を制度と内容の両面で支えていたのは教会であった。教育において世界観を形成する上で根幹に据えられていた原理は宗教だった。

農奴解放後もロシアの教育においては依然として教会が勢力を保っていた。宗務院は僧団が開設した初等教育機関の管轄権をもち、教育省とは別個に教育活動を行うことができた。さらに宗務院の管轄する教区学校以外の学校における教育活動を指導する群学校委員会という機関にも、宗務院の代表が委員として参加していた。しかし教育現場における神学教育は形骸化し、かつては保持していた教育に対する教会の勢力は政府により制限されることになった²。

これに対して新しいスタイルの教育を1860年代に始めたのが、ウシンスキーやヴォドヴォーゾフなどの教育者だった。彼らは形骸化した神学教育を批判し、教育を教会の影響

¹ 浜本純逸ほか『世界教育史大系 15 ロシア・ソビエト教育史 I』講談社、1976年、177、184-186頁を参照した。

² 同書、187-188頁を参照した。

を受けない近代的なシステムに置き直すことを主張した。

このようにして、教育における宗教の統制力が低下し、宗教によらない新しい教育を実現する動きが活発化した。

b. 新しい教育は脱宗教と世俗化を目指す

教育改革は教育の世俗化という方向性を持っていた。では具体的に何が変わったのか。新しい教育における科目や教え方の変化とその変化の根拠となった教育者たちの思想を考察する。

1860年代に入っても古典ギムナジウムという高等教育機関では依然として神学とギリシア・ラテン語が主要な科目だった。これに対してウシンスキーやゲルツェンは従来の教育が神学教育と古典語に偏っていることを批判した。そしてカリキュラムを大幅に変え、宗教に変わって文学と自然科学を、古典語に変わってロシア語やドイツ語、フランス語等の近代ヨーロッパ語を教えようと主張した¹。

この変化は単に教える内容を変えるにとどまらず、宗教の統制力から脱却し、教育を支える新たな価値体系を構築する意味を持っていた。

科目の変化は教授法の変化も伴っていた。ウシンスキーをはじめとする教育活動家やゲルツェンは宗教教育の偏重と古典語の詰め込み教育法を批判し、代わりに自然科学やロシア語の授業で考える能力をはぐくむ教授法を論議を繰り返しながら実践していった。これは宗教と古典語の教育を貫くスコラ的で中世的な教授法とそれを支える世界観からの脱却を意味していた²。彼らは、新たな教育に自立的に社会に参画できる人間を育てる役割を見ていたのである。

1860年代におけるこうした教育改革は、ロシアの教育を統制している制度を否定し、近代的なシステムに作り替える改革でもあった。ここに教育を支えていた宗教的な世界観と近代社会の世界観の世代交代を巡るせめぎ合いを見ることができる。改革を担う教育者たちがめざしたのは、教育を世俗化することだった。

このように1860年代は宗教の統制力が弱まり、新しい教育が始まろうとする教育の世俗化が進んだ時期だった。この中でゴーゴリを含むロシア文学が教育に取り入れられ、読み方が構築されていく。

第二節

¹ 同書, 172頁を参照した。

² 同書, 318-319頁を参照した。

1860年代にロシアの教育の改革が行われたが、この改革はゴーゴリの読みかえにどのように関係したのだろうか。

以下ではゴーゴリを教材に選んだ理由を新たな教育方針と関連づけて考察する。また教育者のロシア文学観がゴーゴリ作品の読みかえにどう関わっていたかについても考察する。

a. 考える人間の育成を目指した

前述したように教育改革を担った教育者であるウシンスキーたちの教育方針は詰め込みをやめ、考える能力を育てるといったものだった。

ロシア文学の授業もまた、この方針の下で行われた。では実際にロシア文学の授業ではどのような教え方がされたのだろうか。また、教育者はロシア文学の授業にどのような意味を見いだしていたのだろうか。

以下ではウシンスキーの友人だった教育者ヴォドヴォーゾフ¹の授業を取り上げ、ヴォドヴォーゾフが授業を通じて育成を目指した人間像について考察する。

ヴォドヴォーゾフの授業の特徴

ヴォドヴォーゾフが実践した文学教育の特徴とは何だったのだろうか。従来の文学教育は、修辞や述語の詰め込み教育であった。これに対してヴォドヴォーゾフは文学の教育を単なる述語の暗記にせず、「文学作品の形象を実証的に表現に即して解釈²」していくという方向で進めた。実証的な解釈の方法をヴォドヴォーゾフは科学の方法であると考えていた。このような文学の読み方は多くの教師の目を開かせたという。ヴォドヴォーゾフはこの教育方法を、『範例と解釈による文学教育』に記した³。

この方法はヴォドヴォーゾフの提唱した子ども向けの読本の授業に典型的に示されている。ヴォドヴォーゾフの読本の授業は、身近な情景、たとえば子どもの身の回りにある教室や自然の情景を叙述した文章を実際のものや事柄に直接関連づけて把握していくことから始まっている⁴。

¹ ヴォドヴォーゾフは1829年、商人の家庭に生まれた。1847年にペテルブルグ大学を卒業後、ロシア語と文学の教師としてワルシャワ、ペテルブルグのギムナジウムで教鞭を執る。1886年没。経歴については同書、320頁を参照した。

² 同書、332頁より引用した。

³ 『範例と解釈による文学教育』は、ヴォドヴォーゾフがジュコフスキイ、プーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ（『検察官』『死せる魂』『昔気質の地主たち』）を用いて実証的な解釈を行った文学授業をまとめたものである。ヴォドヴォーゾフの教育論と授業の内容に関しては同書に掲載された論文、浜本純逸「特殊研究一 ヴォドヴォーゾフの文学教育論」317-340頁を参照した。

⁴ 同書、324-326頁を参照した。

ヴォドヴォーゾフの文学教育はこのような読本の授業によって培われた言葉の能力、すなわち言葉を現実の事柄と結びつけ、言葉を通じて有機的に世界を把握していく能力を伸ばす延長上にあった。

ゴーゴリ作品の授業例

たとえばゴーゴリの『昔気質の地主たち』を教材とした授業を、浜本は論文の中で3段階に分けて再現している¹。

第1段階は読解の授業である。ここでヴォドヴォーゾフは地主夫婦の屋敷の描写について質疑応答を繰り返す。例えば「回廊の描写は何のためになされていますか」と質問すると生徒が「家の描写のためになされています」と答える。こうしたやりとりを通じて屋敷の作りを把握しようとする²。

第2段階の解釈においては、情景描写からゴーゴリがどのような田舎観を持っていたかを析出しようとしている。この際ヴォドヴォーゾフは語り手の「わたし」とゴーゴリを同一視する³。

最後にヴォドヴォーゾフは生徒に作文を課す。まず読解で学んだゴーゴリの観察方法と作品のプランを確認させる。その上で生徒に作文のプラン作りなどの実践を通じて作文させる。作文の課題とは、たとえばゴーゴリが『昔気質の地主たち』に出てくるものをどのように観察して表現したのか、どのような構造の文章を書いたかという技術的な点、さらには主題をどのように表現したかという主題と文章表現とのかかわりに至るまで授業における解釈をもとに記述することである。さらにこうした学習を通じて今度は自分の身の回りのことについて、学んだことをもとに作文するという課題が課される⁴。

ヴォドヴォーゾフの読解と解釈の仕方には、我々に違和感を与える点もある。これはヴォドヴォーゾフがゴーゴリの作品の独自性や作品世界の把握を目指していないことに由来すると考えられる。浜本はヴォドヴォーゾフの解釈の特徴を「作品の内的な統一をもたらしている主題へと向かうのではなく、作者と表現との関わり方に注目していくところ⁵」ととらえている。

しかしここで注目したいのは、ヴォドヴォーゾフの読み方は徹底して、書き手が叙述した文章を、書き手という主体とその周りの世界のという図式の中で把握しようとするもの

¹ 同書、332-339頁を参照した。

² 同書、333-334頁を参照した。

³ 同書、335-336頁を参照した。

⁴ 同書、338-339頁を参照した。

⁵ 同書、336頁より引用した。

だった点である。ヴォドヴォーゾフがめざした読む能力とはこの意味で、まず言葉を運用する主体を想定し、この主体が言葉を通じて世界と関わっていくというものであった。

ヴォドヴォーゾフの教育理念

この方針はヴォドヴォーゾフが目指した新しい文学教育に基づいていた。それは言葉の訓練を通じて独自の思考ができる人間を育成するものであった。

こうした教育は、生徒一人一人が世界に参画し、世界を構築していくことを目指したものであったといえる¹。知識を一方向的に与える教育と対比するとわかりやすい。この能力は実践を通じて培われ、社会秩序の把握、認知の構造化などを通じて獲得される。実践の中でこうしたものを把握するための言葉を獲得することが最終的な目標であった。この種の教育法には、主体が能動的、かつ創造的であり、実践とその意味の特定を通じて世界を構築していくという人間観²が内在していた。

ヴォドヴォーゾフは自分で考え、それを表現できる人間の育成を目指した。自ら考えることで独立した主体となることができるのであり、こうした人間が必要であるというという観念を強く持っていた。ロシア文学の授業は、独立した主体を育成する言語教育のための教材として位置づけられた。

b. 新しい教育プログラムとしてのゴゴリ作品

b-1. 教育プログラムとしてのゴゴリ作品

ヴォドヴォーゾフにとって文学は考える能力をつけ、表現するための教材だった。それゆえにロシア語を操って考える訓練を、文学の内容より先行させる傾向があった。

こうした文学のとらえ方は我々の文学観と異なる。ヴォドヴォーゾフは教材としてのロシア文学にどのような役割を見いだしていたのか。以下ではヴォドヴォーゾフとウシンスキーの教育論から、彼らがロシア文学に託していたイメージを探る。

ヴォドヴォーゾフは、ロシア人にとって外国の文学は現実から遠く教育的意義は薄い、ロシア文学はより人間的で理解しやすく、ロシア国民の国民性や現実の生活についての理解を深めるものであると考えていた。そしてロシア文学の思想それ自体を重要視するのではなく、それによって生活を変革することを目指すべきだと考えていた³。

これを前述のロシア語教育とあわせて考えると、ヴォドヴォーゾフの教育は、教会と国

¹ バジル・バーンステイン著、久富善之他訳『〈教育〉の社会学理論—象徴統制、〈教育〉の言説、アイデンティティー』法政大学出版局、2000年、97頁を参照した。

² 同書、98頁を参照した。

³ 前掲書、浜本、328頁を参照した。

家の統制する世界の中で従属的な存在であった人間を無力な状態から、国民として、創造的に世界に参画する能力をもつ存在に引き上げることであったといえる。文学の授業で重視されたロシア語教育は、こうした国民のイメージと結びついている。

教育者たちは言語教育に役立つことだけではなく、内容面でもロシア文学に教材としての重要な役割を見いだしていた。文学はロシア人が新たに国民として生きるためによってたつ価値観、考え方、生活を記した情報源であり、一つのプログラムとして捉えられていた。文学を通じたロシア語の学習は、こうしたプログラムを言葉の学習を通じて習得していくことであった。

ヴォドヴォーゾフは文学作品に、彼の考える国民という枠組みの中で生きる人間の表象を見だし、そこから読み取れる生き方や表象を支える世界観を読み取り、それを含めた教育プログラムとして文学をとらえていたと考えられる。

ヴォドヴォーゾフはロシア文学に、国民の生き方やロシアの生活の特性について学ぶための教育プログラムとしての役割を見いだしていたのである。

b-2. 正統な文学としてのゴーゴリ作品

ヴォドヴォーゾフの教育論において、ロシア文学はこのような役割の教材ととらえられていた。しかしどんな作品でも教材になると考えていたわけではない。

ヴォドヴォーゾフとウシンスキーが教材として選んだ作品は、ロシアの民話、ジュコフスキー、クルイロフ、プーシキン、ゴーゴリ、ネクラソフなどであった¹。これらの作品に共通する特徴を文学が教育プログラムであるという考え方と併せて分析することによって、彼らがなぜこれらを選択したかを考察する。

まずゴーゴリを含む前述の作品群にはすでに古典として、あるいは優れた作家の作品として広く認知されているという共通点がある。このことはウシンスキーが「公教育における国民性について」という論文²の中で述べる国民教育の条件と関わっている。

ウシンスキーは論文の中で、イギリス、フランス、ドイツなどのヨーロッパ諸国における教育史を各々の国が自国の歴史、文化を教え、それぞれの教育制度に基づく国民教育があらわれてきたという物語に編集する。そしてこうした公教育こそが近代的な教育形態であると述べている。ウシンスキーは公教育を各国の国民性や歴史の中で生み出された伝統などの上に成立するものだと考えている³。

¹ 同書、浜本、320-322頁を参照した。

² ウシンスキー『ウシンスキー教育学全集 I 国民教育論』柴田義松、菅原徹訳、明治図書出版、1965年を参照した。

³ 同書、45-48頁を参照した。

ウシンスキーによると、ロシアではこのような教育が実現されていない。「ロシア教育のなかの道徳的な要素について」という論文の中で、ウシンスキーはロシアの教育はロシアの国民性や歴史、ロシアに関する知識を教えていない不十分なものであること、さらには国民教育というものがどうあるべきかということすら構想されていないことを指摘する¹。

ウシンスキーの構想するロシアの国民教育とは、以下のようなものである。

「教育は、ロシア国民の中に、国民自身が存在しただけの年月の間存在しているのである。－それは国民とともに生まれ、国民とともに成長し、時分のうちに国民の歴史、国民のあらゆる良き特質、悪しき特質を反映している。」²

このような国民性を基礎に据えた教育が国民教育であるならば、その基礎には伝統と国民性、ロシアについての知識が必要であった。

この文脈において教材として選択された作品は国民教育にふさわしい条件を備えていた。ゴーゴリを含む作家たちは広く認知された有名作家であり、彼らの作品や民話にはすでにロシアの生活のプロトタイプや民族性が見いだされていた。ゴーゴリとロシア性を結びつける読み方はベリンスキー以来受け継がれてきた読み方だった。ウシンスキーやヴォドヴォーゾフはこうした読み方を教育の領域に持ち込み、文学作品をロシアの伝統や国民性というフィクショナルなものを学ぶにふさわしい、新しい教育プログラムとして活用した。

ゴーゴリの作品を含む前述の文学作品が教材として選ばれたのは、国民教育が成立するために必要な国民性や正統性を備えていたためであった。

こうして選ばれた作品は、ロシア語やロシアに関する知識の教育を通じて、教育者たちが構築した国民像にふさわしい人間を育成する教育プログラムの役割を担っていた。

1860年代のこうした教育改革の中でゴーゴリが読みかえられた。新しい国民教育を実現するという目的の中で、ゴーゴリ作品の理論的根拠を持つはっきりした読みかえと意味の付与が行われた。以上、ゴーゴリの受容史で生じた読み方の転換点の一つと、その読みかえの経緯と内容を明らかにした。

第二章

1860年代にゴーゴリ作品は、教育に役立つという読み方をされた。その後の20世紀初頭まで、ゴーゴリの読み方には教育的目的、啓蒙という目的がついて回る。

¹ 同書、118-119頁、131-135頁を参照した。

² 同書、132頁より引用した。

教育現場ではその後もゴーゴリが教材として使われていたが、教育現場以外にもこうした読み方を明確に打ち出していたのが出版業界だった。1870年代以後の出版においてゴーゴリはどのような形で出版され、その中でどのような意味を帯びるようになったのだろうか。

第二章では、1870年代以降の出版業界における啓蒙ブームと、ゴーゴリ作品の出版に見られる特徴の二点から、この問いについて考察する。

第一節 啓蒙的出版におけるゴーゴリ作品の位置づけ

1870-1880年代の出版業界の動きとして注目されるのは、民衆の啓蒙を標榜した出版社が次々現われたことである。これは出版界における啓蒙ブームといえるほどの出来事だった。こうした出版社はいくつかの種類に分けられるが、大別すると読者を実際にナロードに絞った出版社と啓蒙を目的として古典を出版する出版社の二種類に分けられる。

この啓蒙ブームとゴーゴリ作品との関わりに焦点を当てる。啓蒙向けの出版物が出る中で、ゴーゴリ作品はどのように位置づけられたのか。ナロード向けの出版と中流向けの出版の二点から分析する。

a. ナロード向けの出版活動

ナロード向けの出版物を出す出版社が1880年代から急増する。一口にナロード向けとは言っても様々な会社があり、出版方針も多様だった。だがそれらの会社に共通点があるとしたら、それはどのような共通点だろうか。いくつかの出版社の例を挙げ、各々の違いと共通点を分析する。

a-1. 出版社の多様性

啓蒙を目的とした出版社の中には、ナロード、特に識字率を徐々にのばしてきた農民に向けて出版活動を行った出版社があった。

まず挙げられるのが、ナロードのために固有の出版物を確立しようとした出版社である。イラストを印刷しただけのルボークに似た出版物やナロード向けに書き下ろした独特のスタイルを持つ文学作品を発行した。例えば農民向けの出版物を発行したロシアの富出版社は、1886年に特別にナロード向けに書かれた文学作品をシリーズで出版して失敗した。これらは非常に教訓的な内容のラスカースで、農民には不評であった¹。

これと同じ傾向の活動をする出版社はほかにもあった。例えばジルコフ出版社はナロー

¹ Книга в России, 1881- 1895. Спб. : 1997. С. 167.

ドのための教科書や三流作家のラスカース等を過剰に簡単な言葉によって記述した本を出版した¹。

一方、慈善活動の一環としてナロード向けの出版を手がけたイクスクリ男爵夫人の例では、ロシアの古典を改作したものや同時代作家の作品を出版した²。しかしこうした活動で成功する出版社は少なかった。

ルボークを専門に手がける出版社や、グラズノフ社、マルクス社のような大手の出版社はルボークや三文小説に比べると高価だったものの、古典作品を格安で出版した³。

識字委員会もナロード向けの出版活動を行ったが、明確な良書志向で過去の大作家の古典を中心に出版した⁴。

このようにナロード向けの本でも実際の読者層はそれぞれに異なり、出版方針、内容の点でも多様な出版活動が行われていた。

a-2. 出版社の共通点

そんな中にも一部の出版社の間では共通する傾向が見られた。

まず啓蒙目的で文学作品を出版するに当たり、外国よりもロシアの作品であることにこだわる傾向があった。それが古典であれ、農民のためだけに書かれた作品であれ、ロシアの作品を安く読者に届けることが啓蒙には必要だという認識があった。この認識は、ナロード向けに新たに書いた三流小説や、良書志向の強い識字委員会と大手出版社がシリーズ化して発行した作品集の出版方針に共有されていた⁵。

おそらくこの共通認識は、出版活動そのものの中でより強化されて定着したものでしょう。というのも、啓蒙を標榜しつつも実際には、売り上げを見込んで文学を看板商品に据える側面があったからである。ロシア文学が啓蒙を目的として、あるいは別の目的に従って啓蒙の重要な柱をなすジャンルに定着したことは、この時期の出版界における重要な変化であった。

b. 中間層向けの出版

ナロード向けと並び、1870年代以降中間層向けの出版物も増加した。こうした雑誌は新しい読者層を前提としていたため、その形態にも新しさが見られた。こうした出版物で

¹ Там же. С. 167-168.

² Там же. С. 165-167.

³ Там же. С. 168.

⁴ Там же. С. 165.

⁵ Там же. С. 169-170.

はゴゴリ作品の位置づけ方にも変化が見られるのではないだろうか。マルクス出版社が発行したイラスト週刊誌『ニーヴァ』を例に、出版目的とゴゴリの扱い方の変化を考察する。

b-1. ニーヴァの使命

『ニーヴァ』は豊富なイラストをセールスポイントにし、内容も家庭での娯楽向けに文学、都市のニュース、広告が大半を埋める雑誌だった。『ニーヴァ』には1870年代前半からゴゴリ作品の一部、または要約を伴う紹介記事がしばしば掲載された。"Описание рукописей и изобразительных материалов Пушкинского дома"¹には、ゴゴリ作品を題材にしたイラストの目録が収録されている。それによると『ニーヴァ』本誌には1872年から1902年の間に合計19点のイラストが掲載された。『ニーヴァ』が対象としていた読者層は4ルーブルの購読料を支払い、広告の商品を購入できる人々である。また『ニーヴァ』を低俗な雑誌として軽蔑する知的上層階級は除外される。雑誌は以上の条件に当てはまる中間層を雑誌の読者として想定していた。こうした読者層に文学を普及させ、それまで知識人だけのものであった文化を階級降下させる役割を『ニーヴァ』は担っていた。

b-2. コンテンツの単純化

こうした方針に基づくゴゴリ作品の掲載例を見てみよう。

1872年の第7号には『タラス・ブーリバ』の一場面を描いたイラストが掲載され、半頁ほどの説明がつけられた。そこではこれがゴゴリ作品の一部なのは共通理解であることが確認されている²。1878年の第20号では『検察官』の一場面を描いたイラストとともに、ゴゴリ作品の知名度に関する『ニーヴァ』誌の認識が以下の記述に示された。「今や、ゴゴリの『検察官』が『ニーヴァ』の読者の誰にとってもこの記事で初めて目にするような文学作品でなくなったことはいうまでもない。」³

ただし作品の知識の水準は疑う必要がある。『ニーヴァ』はイラストの多い雑誌であり、読者の教育水準には幅があった。また『ニーヴァ』は地方の住人を読者として強く意識した雑誌であり、1904年の『ニーヴァ』50号に載った記事では、1880年代以前のロシア郊外における読書状況についてこう記述されていた。

¹ Описание рукописей и изобразительных материалов Пушкинского дома. М.: Изд-во Академии наук СССР, 1951. Т. 1. Н. В. Гоголь. С. 89, 98-99, 105, 111, 113.

『ニーヴァ』本誌には『タラス・ブーリバ』『ヴィイ』『検察官』『ローマ』などの紹介がイラスト付きで掲載された。

² Нива. 1872. №7. С. 101-102.

³ Нива. 1878. №20. С. 350.

「例えばコリツォフ、コズロフ、フォンヴィージン、エカテリーナ二世、ポレジャーエフ。彼らの名前はみな知っているが、誰もそれが実際にあるのを見たことがない。[中略]この一連の作家の中には、もう少し新しい古典作家もいる。レールモントフやグリボエードフである。しかしロシアのすばらしい文学は読者公衆の大部分にとって手の届かないまま残されていた。」¹

1870年代の『ニーヴァ』が読者はゴーゴリ作品を知っているとみなすとき、それはゴーゴリ作品を全部読んだということではなく、まさに『ニーヴァ』が提示したような断片的な知識を持っているだけの可能性が高いのである。

このように『ニーヴァ』は文学作品を掲載していたが、例えばゴーゴリ作品を掲載する際には、作品の抜粋やイラスト、断片的な解説が主体だった。これらは作品そのものではなく作品についての言説である。こうした掲載の仕方の理由は、メディアと文化の流通という視点から説明することができる。

『ニーヴァ』のこうした掲載の仕方は、文化を階級降下させる上で必然的であった。上層文化をその下の階層が受容する際に、まず文化のコンテンツを単純化して教えるというのは不可避のプロセスである。『ニーヴァ』がのせた記事は作品そのものではなく、作品の要約や読み方の例を読者に提示するものであった。『ニーヴァ』はそれまで文化の圏外におかれていた人々に対して「文化」を解放していく役割を引き受けていたのである。

『ニーヴァ』の文学作品の扱い方には、中間層に文化を階級降下させるという出版目的と、それに伴うコンテンツの単純化が現れていた。

以上のように、ナロード向けと中間階層向けに分けて啓蒙的な出版物を分析してきた。その出版傾向は多様であり、文学作品の扱い方にも違いが見られる。しかしロシアの文学作品が、知識人のみならずナロードや中間層のものとなるように文学を受容する階層を拡大させる傾向では一致していた。この中でゴーゴリを含む文学作品は、階級を超えて共有されるべき財産という位置づけを確立していたことがわかる。

第二節 出版で生じた新しい受容形態

このような共通理解があった一方で、文学作品の扱いは出版社の方針や対象とする読者に応じて揺れ幅が大きかった。ゴーゴリ作品の出版における扱いは、出版する際の文脈で変化するので、1860年代の教育において意味づけられたような啓蒙性とは異なる意味づけがなされていったと考えた方がよい。

以下ではゴーゴリ作品に投影された啓蒙性が出版活動の中で変化する方向性の一つを

¹ Нива. 1904. №50. С. 1014.

取り上げ、出版物の分析を通じて把握する。

1880年代から20世紀初頭までに出版されたゴーゴリ作品の出版物のうち、新しいパターンとして確立した二種類の方式の出版物を分析し、そこから変化を明確にしていきたい。

a. 全集の出版

a-1. 全集の出版例

一つ目は全集の出版である。1880年代から、ロシアの有名作家の全集の点数が増えた。ゴーゴリも例外ではなく、ナロード向けの安価な全集、主要な作品のみを集めた作品集が出版されるようになる。

ここでもマルクス出版社の全集を例に考察する。その中で1880年代から『ニーヴァ』は誌面ばかりでなく、無料付録という形で古典作品集を毎年出版する企画を始めた。文学作品の付録は『ニーヴァ』だけでなく、他の雑誌でも発行された¹。これは購読者を増やす有効な手段だった。この付録を通じて、古典文学を雑誌がどう扱ったかを考察したい。

『ニーヴァ』は付録として『ニーヴァ文学著作集』と言うシリーズ名の文学全集を1888年から毎年発行した。この全集にはロモノーソフ、ドストエフスキイ、グリゴローヴィチなどの作家が名を連ねた。この付録は無料でありながら内容が充実しており、購読者を増加させる上で大きな役割を果たした。しかし無料付録につられて購読を申し込んだ『ニーヴァ』の読者がみな実際に全集を読破したとは考えられない。付録による購読者数の増加は、内容以上に作家の記号性が読者に訴える力を表わしている。

また18世紀から19世紀前半の文学全集のシリーズ化は、古典文学というカテゴリーの強さを示している。古典文学というカテゴリーはそれ自体に実体はなく、有名作家の名前と古典文学であるという保証によって流通する記号であった。古典そのものに興味があるのではなく、むしろ記号に意味を見だし、古典を新たに知識として蓄え、開放された知の領域に踏み込む行為を自らのアイデンティティとする階層の存在が付録の人気を支えていた。

『ニーヴァ』がゴーゴリを含む作家を選択した理由もまた記号によるものだった。『ニーヴァ』誌上にゴーゴリの選択を意味づける言説をしばしば載せたのは、ゴーゴリの紹介をすることが啓蒙と結びつくとする1860年代以来の言説に従ったり、他のメディアで言及される頻度を考慮したからであり、作品そのものを吟味することが重要だったわけではない。

¹ 詳しくは拙著「マルクス出版社の『ゴーゴリ著作集』『SLAVISTIKA XVIII』(東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報)、2003年、27-52頁を参照されたい。

a-2. 古典文学の記号化

『ニーヴァ』はメディアの力を生かして文化を新しい読者階層に啓蒙する役割を實踐した。ここに文化の枠組みと受容の仕方の変化を見ることができる。

これは古典文学が再構築されるプロセスであった。作品の選別を行わせたのは、作品にまつわる言説や扱い方などの外的条件であった。例えば『ニーヴァ』は前述したように啓蒙を目的として作品の断片だけを掲載した。この編集奉仕人にはすでに認定されている文化を単純化し、伝播する価値があるとする考え方が現れている。

それまでの評論や知識人の見解の集積によって保証された作品の社会的評価が基準として優先されていたのである。完成度の高い付録にしてもそれは同じことであった。付録のゴーゴリ全集のように、テキストの正確さや網羅性を追求することによってアピールされた作品そのものの価値への忠誠は、実は記号化した古典文学の流通を促すためのオプションであり、同時にゴーゴリの古典としての価値を示すオプションであった。まずは知識や枠組みを学んでから、本物を手にして読んでみるという文学への接し方をメディアが誘導し、読者たちはそうした読み方を受け入れていた。

この時期における古典文学の観念は出版社と読者の文学を巡るこうした行為の様態を含む場で構築された。その中で完成度の高さを追求した『ゴーゴリ著作集』は出版そのものがゴーゴリの古典としての価値を表わすシンボルだといえるだろう。

b. イラストの出版

次に、全集とほぼ同じ時期に出版されたゴーゴリ作品のうち、もう一つのパターンを持つ出版物について考察する。その出版物とはイラスト付きの出版物である。ゴーゴリ作品の場面を描いたイラストは点数が非常に多く、雑誌や単行本に挿絵として掲載されたりイラスト単独で出版されることもあった。

b-1. イラストの出版例

『ニーヴァ』は特にイラストを多用した雑誌である。前述したように、『ニーヴァ』本誌には『タラス・ブーリバ』『ヴィイ』『検察官』『ローマ』などの紹介がイラスト付きで掲載された。

イラスト雑誌のほかにも過去に制作されたゴーゴリ作品のイラストの復刻版が出版された。これに関しては19世紀におけるゴーゴリ関連の出版物の目録を収録した"Гоголевский сборникъ 1852-1902"¹を参照する。

¹ Гоголевский сборникъ 1852-1902. / Под ред. М. Сперанскаго. Киевъ, 1902. С.226-227.

目録には多くのイラスト集の情報が収録されているが、特に優れた作品としてピョートル・ソコロフによるイラスト集『死せる魂』を挙げる。これは『死せる魂』のイラストの中でも点数・質ともに優れた作品でありながら初版の1891年まで一度も発表されなかった作品集である。また1892年に再版された画家アーギンによる『死せる魂』にも注目したい。これは1840年代に一度出版されたが、1892年に再版するにあたり、初版のスタイルを踏襲せずリメイクした形で出版された。ボクレフスキイの画集も数多く出版された。ボクレフスキイは1860年代からゴーゴリ作品を題材にしたイラストを描き続けた画家である。

出版社が同時代の画家に注文してイラスト付きゴーゴリ作品集を制作するケースも世紀末から20世紀初頭にかけて、非常に多く見られた。特に1902年以降は急増した。例えばナロードの利益出版社は1902年に画家マコフスキイによる『死せる魂』の44枚のイラストを掲載した『ゴーゴリのイラスト付き作品集』を出版し、パヴレンコフ出版社はズブリャニコフとピロゴフによる180枚のイラストをつけたゴーゴリの一巻本を発行した¹。マルクス出版社は365枚のイラストが掲載された『チチコフの遍歴あるいは死せる魂』と題する豪華本を出版した。ビヤトカ県のゼムストヴォは『ゴーゴリ作品集』三巻本にクストジエフ、チュプリネンコ、ルイーロフの制作したイラストを載せた『ゴーゴリ作品集』を出版した²。

b-2. シンボルのみの提示

上に上げたイラスト出版物にはどのような特徴が見られるのだろうか。どの作品集にも共通するのは、作品の点数が非常に多いことである。イラスト数が10や20であればそれはテキストの説明や付属物として機能する。しかしある水準を超えたとき、出版物の中でイラストの持つ意味が変わるのではないだろうか。100を超える点数は、イラスト同士の結びつきによってテキストとは別の作品世界を動かし始める効果を持つように思われる。

その作品世界の向かう先は、ゴーゴリ作品を象徴する登場人物や有名なシーンの遊離である。有名な人物やシーンはその知名度を背景にして作品そのものから遊離し、作品全体を代表するシンボルとして機能するようになる。テキストがなくとも、イラストが提示したシンボリックなイメージがゴーゴリ作品の世界を背負うようになる。

その典型的な例として挙げられるのが、ボクレフスキイのイラストである。ボクレフスキイはその作品の多くがゴーゴリ作品に登場する人物の肖像画という特異な画家である。

¹ Коростин А. Ф., Стернин Г. Ю. Герои Гоголя в русском изобразительном искусстве XIX века: Литературное наследство. М.: Изд-во Академии наук СССР, 1952. Т. 58. С. 880-881.

² Там же. С. 881.

イラストは出版物の形で版を重ねるだけでなく、ペンケースや便せんなどの商品にも印刷されてゴゴリ作品のシンボルとして広く流通した¹。

こうした現象が可能になるのは、当時の出版活動によってゴゴリ作品がテキスト全体を伴わずに知名度を拡大する仕組みができあがっていたためではないだろうか。

国民的な財産という意味づけの先行

ゴゴリ作品の全集の出版とイラストの出版の分析から、ゴゴリ作品を出版する際に、その出版傾向に応じて扱い方に変化が現れたことが明らかになった。

ゴゴリ作品のシンボルのみを提示したり出版そのものをシンボル化するという変化は、啓蒙という目的を共有していた出版社による活動の中で現れた変化だった。

これは、ゴゴリ作品がロシアの国民的財産であり、ゴゴリ作品を読むことによって何かを得ることができるという、1860年代の教育者たちの考え方とは異なっていた。ゴゴリ作品集を所有することやゴゴリ作品をたとえ一部でも知ることそのものに啓蒙的な意味が与えられるという価値の転換がおこっていたと考えられる。

結論

1860年代から20世紀初頭にわたるゴゴリ作品の読み方の変化を、教育と出版の二つの領域から考察した。

第一章ではゴゴリの作品が啓蒙的な作品として読み替えられる端緒を1860年代の教育改革に探り、その読みかえの方向性を明らかにした。

この読みかえの根拠となったゴゴリに対する1860年代の教育者の見方は、啓蒙を目指す一部の出版社に共通するものだった。しかし啓蒙ブームにのって様々な出版社がゴゴリ作品を出版するのに応じて、作品がもつ啓蒙性の新たな意味づけがいくつか現れた。第二章では、その中から同時代の出版状況や読者の読み方に適応した意味づけが生き残っていくプロセスを追った。

本稿は作品の読み方の変化が生じるとき、その変化はどのようなきっかけによってどのようなプロセスを経て進むのかという視点から考察を進めた。作品の読み方の傾向が大きく変わる際には、変化を示す小さな出来事が複数現れる中から状況に適したものが選択的に残される。そしてその読み方が出版活動に還元される中でさらなる変化を繰り返すという過程をゴゴリ作品を例に考察した。

¹ ボクレフスキイのイラストが商品に用いられた例が以下の文献に記されている。Кузьминский К. К. Художник иллюстратор П. М. Боклевский, его жизнь и творчество. М., 1910. С. 8.

本論文は平成 16 年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

Changes in 'reading' Gogol's works after 1860s

ONO Tokiko

This paper examines a turning point in the history of 'reading' Gogol's works. The social meaning changed in the 1860s and grew to become the national classical works at the end of the 19-th century in Russia. We analyze the 'reading' of Gogol's works in the spheres of education and publication in the latter half of the 19-th century.

First we examine the relationship between the educational revolution and Russian literature 'reading' of the 1860s in Russia. A new educational system was demanded after the emancipation of serfs and the young educators tried to construct the content and methods of education in the 1860s. Their purpose was to bring up new, national figures that knew their own country. They used Russian literary works as textbooks to teach Russian culture, language and national character. Russian literature, including Gogol's works were read and considered a good educational program. In this manner, Gogol's works changed its social meaning during the educational revolution of the 1860s.

Second we examine the activities of publishers and some publications after the 1870s in Russia. Many publishing companies were established in the 1870s and their business policies and publications were extremely valuable. They were united in the publication of Russian literature as educational and classical materials. We examine two kinds of publications.

We analyze the illustrated magazine "Niva" in which Gogol's works often appeared. In Niva, only Gogol's character's illustrations or fragments of novels, which symbolized his works, appeared. Gogol's works were treated as famous classics, whose fragments were considered a valuable cultural heritage to be introduced. We also analyze the complete works of Gogol. This was the edition that had collected most of Gogol's works and was stringently proofread. We also find that many completed works of Russian classical writers, including Gogol were published at the end of the 19-th century. They were published as symbolic publications of national heritage not only to be read but also to be owned. We found that the educators' decision of a context of Gogol's works in the 1860s made a turning point of 'reading.' Moreover, the publishers developed the context and converted them into a national heritage at the end of the 19th century.